

宿命の人魚、メアリ

——『メアリ・バートン』のファム・ファタル考察——

Mary as a Fatal Mermaid:

An Examination of “Femme Fatale” in *Mary Barton*

桐 山 恵 子

Kiriyama, Keiko

ABSTRACT

Mary, as if only existing in the Pre-Raphaelite Brotherhood paintings, is such erotic as to perplex every reader of Elizabeth Gaskell's *Mary Barton*. Her enticing eyes, her sensuous lips, and her rich golden hair appear more suitable for the heroine of a flamboyant love story than that of the industrial novel dealing with the conflict between bourgeois factory managers and workers in Manchester from 1834 until 1842. Our concern is to examine the female protagonist employing the idea of “femme fatale”, a cultural icon of a fascinating but threatening woman that flourishes especially in the second half of the 19th century. The purpose of this paper is to show that Mary's enchanting figure stands for her secret power of mermaid, that is, a beautiful destroyer of seamen's hearts in the deep.

彼女の半分だけ開かれた口は、モチノキの赤い実のように深紅色で、それは透けるように白い肌と、美しい対照をなしていた。活発な血液が流れ込むと、顔は淡紅色に染まっていく。黒いまつ毛が繊細な頬に触れ、その頬にさなる陰影をつけるのは、ふわふわと揺れる豊かな金髪だった。(107)⁽¹⁾

(1) Elizabeth Gaskell, *Mary Barton*. (Oxford: Oxford UP, 2006). 以下、この作品からの引用は括弧内にページ数を示す。なお日本語訳はすべて拙訳による。

この描写における魅惑的な女性の正体は、19世紀イギリス産業都市の紡績工場で働くジョン・バートンの一人娘メアリが、老いた職工の思い出話に聞き疲れ、うたた寝する姿である。エリザベス・ギヤスケルの長編小説『メアリ・バートン』(1848)は、その序文で作者自身が「マンチェスターの工場で働く多くの人たちが、何を感じているのか、私が理解したことを描こうとした」(5)と主張するように、「増大する人口と急激な産業的拡大」の中で、「階級闘争、労働組合、チャーティスト運動」(フォスター ix)に巻き込まれる労働者の日々の生活を描いた作品である。ウィリアムズは代表的産業社会小説の例として『メアリ・バートン』を挙げているし(87)、ティロットソンは「社会問題を直接扱った小説」(202)である『メアリ・バートン』はマンチェスターの生活、しかもエンゲルスが見たそれと等しいものを描いた物語」(210)と解説する。

すなわち先の引用で描かれたメアリ・バートンは、対立していた労働者と工場経営者が最終的に和解する過程を描いた産業社会小説のヒロインにまちがいない。しかし、いかに小説のタイトル・ロールといえども、自身もお針子である貧しい労働者の娘を描くにしては、その描写はあまりに官能的過ぎないか。白い肌に映える深紅の唇と黒いまつ毛、そして豊かな金髪をたゆたえて眠る姿は、労働者階級の娘というよりは、例えばラファエル前派の絵画で描かれるような、男性の欲望を具現化した夢の女に近い⁽⁴⁾。

快楽と美のけだるい肢体に、すんなりした白い顎、夢見るような神秘的な瞳

(2) フリードリヒ・エンゲルス 『イギリスにおける労働者階級の状態』上、下巻、(新日本出版社、2000)。

(3) 1848年にダンテ・ガブリエル・ロセッティを中心に、ラファエル以前の初期イタリア絵画を理想として結成されたイギリスの芸術家グループ。「文学的・宗教的な題材のもとに、自然の細密描写と、それにアクセントをつける明るい色彩同士の強い対比を媒介としながら、視覚的・官能的な一種なまめかしいリアリティを表現しようとしたので、そこに特異な象徴主義が生まれ、しばしば装飾的で頹廢的な作風が生じた」(岡田 13)。Figure1, 2(図版はRodgers 所収のものを使用)を参照。

(4) 「ロセッティの主要な題材は美しい女であり」、ソンストロームによれば「彼の詩の95パーセント、絵画の97パーセントは女性の美と愛を扱っている」(3)。

に、ゆるやかに波うつ、つややかな髪、どこか愁わしげな風情にひめられた妖しい魔性の女—こうした眩惑的でエロチックな美女を、ラファエル前派の芸術家は「絶世の美女」とよんで美の典型とした。(松浦 9)

透けるように白い肌を揺れる金髪で被い、少しけだるそうに眠るメアリは、まさにラファエル前派の芸術家が夢見た究極の女の姿だ。メアリにおける「絶世の美女」の具現化は、彼女が産業社会小説のヒロインの枠組みに収まらず、そこから逸脱していく可能性を示している。そこで本論では、作品におけるメアリの表象に注目することにより、彼女が男性が夢想する女、さらに言うならば、男性を破滅⁽⁵⁾に導く宿命的力をもったファム・ファタルであることを証明する。

I 女

メアリが男性の関心を惹きつけずにおかない魅惑的存在であることは、次の一節を見るだけで明らかだ。「メア리를愛している男は何人もいた。彼女となら喜んで真剣につき合いたいと思う者も幾人かいた。しかし彼らの評判では、彼女は高くとまっているということだった」(42)。メアリは多くの男性にとって花形であるが、中でも彼女と幼馴染の鋳物工場で働く青年ジェム・ウィルソ

(5) ファム・ファタルとは、男性を美貌で誘惑し最後には死へと至らしめる「宿命的力」をもつ女性であり、特に19世紀後半のヨーロッパで作家や画家が好んで取り上げた。岡田は、宿命の女を「一種の魅力的な妖婦」と捉え、「かの女といったん関わりあった者は生活をみだされ、やがて人生の破滅にみちびかれる」(147)と述べる。その文化的表象としては様々な解釈が行われているが、男性が抱く女性への欲望と恐怖—女性の美しさは男性の生命力を奪い取り災いをもたらす—が、世紀末不安とあいまって突出し、もてはやされたと考えられる。松浦も、「現代の批評家は、『宿命の女』を多面的にとらえて、その多面性に、ポリフォニイの読み込みをしている」と断った上で、「ただひとつ、確実にいえることは、『宿命の女』は、妖しい美しさで、男の欲望を永遠にかきたてる対象であり、理想主義が極点にたどりつき、葛藤を意識の本質的形式としたロマン派文学で、もっとも多彩な開花をみた」(11)と述べている。代表的ファム・ファタルとしては、リリス、サロメ、クレオパトラ、カルメンなどが挙げられる。また、その現実的表象としては女優サラ・ベルナール (“Sarah Bernhardt”) が有名である。詳細はBade, pp. 6-39, Sonstroem, pp.105-120, Stott, pp. viii-xiv, pp.1-51, プラーツ, pp.245-386を参照。

ンの傾倒ぶりには目を見張る。

ジェム・ウィルソンは、以前からずっとメアリを愛していたが、ますます深く彼女を愛するようになっていった。見込みはなくても希望をもち続け、諦めようとしなかった。彼にとってメアリへの想いを断ち切ることは、生きることの放棄に等しく思われた。この愛の結末がどうなるかなど、あえて考えようとはしなかった。今こそすべてだ。彼女を見つめ、その衣服の端に触れられるのなら、それで充分だった。(42)

ジェムのメアリへの想いは日に日に増していき、遂には「彼女が近くにいる時、彼はあまりにも不安げに、一心に彼女を見つめるため、ジョン・バートンがジェムの中にある『男気』と呼んでいたものが失われていった」(43)。メアリの美しさは、「少なくとも彼女がそばにいない時は、男らしく、立派で快活な青年」(43)だったジェムを、無気力な状態へ骨抜きにするほどの大きな力をもっていた。

さらにメアリに魅了されたのは、彼女と同じ労働者階級の男性だけではない。労働者とは対立する側である紡績工場経営者の息子ハリー・カーソンは、自分より低い階級の娘メアリに完全に惚れ込んでしまう。彼はメアリを「誰より美人で、愛らしく、最高である」と絶賛し、「メアリに向かって何度も投げキスを送った」(125)。このように彼女の美しい容姿は、階級差を超えて周囲の男性の心を奪ったのである。

そしてメアリ自身も、自分が類稀なる美貌の持ち主であることを自負していた。「彼女は、自分より遥かに高い階級の男性を惹きつけたことにプライドをもっていた。そして、多くの人の憧れの的である彼が、彼女の愛らしい笑顔のためなら何でもする、としばしば話していることに、密やかな喜びを感じていた」(113)。自分の美しさの前に、ブルジョア階級の男性ですらひれ伏すことに喜びを見出すメアリは、それを強みに幼馴染ジェムに対しては、さらに横柄な態度をとる。

「昔からのよしみだから、メアリ」と声をかけた大柄な青年は、彼女に軽くキスをした。「それなら昔からのよしみで、私はこうするわ」と彼女は答え、恥ずかしさよりも怒りのために、頬をバラ色に染めながら、彼の顔をぴしゃりと叩いた。(12)

白い頬をバラ色に染めたメアリは、ジェムの目には非常に美しいと映ったにちがいない。気まぐれな暴力すら、メアリが行えば、すべて美化されてしまう。メアリは、「自身的美貌は唯一無二の希望」(ウグロー 206)であり、さらに「自身の体が唯一無二の資産」(207)であることを認識していた。なぜなら、すべてが金銭的価値に置き換えられるヴィクトリア朝産業都市の経済的状況で、「女性が金銭的価値を生み出すために必要なものは、労働ではなく、彼女の肉体である」(ストーンマン 77)。メアリは、自分に与えられた女としての「資産」を最大限に生かし男性の心を支配することこそ、最大の利益を産出する術であることを心得ていた。

メアリが労働者階級の娘の枠組みを超え、「その力強い個性の発露により、典型的ヴィクトリア朝ヒロインから逸脱している」(ヒューズ 37)ことを裏付ける上で、メアリと彼女の叔母エスタとの対比は重要である。二人の最大の共通点は、まずは両者とも非常な美人である点であり、その外見の類似は父親の目から見ても明らかだ。「ジョンはしばしばメアリを見て、娘が叔母とこんなに似ていなければよいのにと思った。なぜなら二人の身体的類似は、その運命の類似の可能性をも示唆するように思われた」(124)。友達の家へ行く際に、「どの上着がふさわしいかと考えながら……おめかしをするメアリ」(30)を眺めるジョンが、娘の背後に「自分の綺麗な顔を引き立たせようと、洋服にお金をかけていたエスタ」(9)の姿を二重写しに見たとしても不思議はない。では、なぜジョンは、メアリが美しい叔母に似ていることを危惧するのだろうか。

その原因はエスタが抱いた欲望にあった。レイディになることを夢見ていたエスタは、その美貌で上流階級の士官の心をとらえて駆け落ちするが、結局、不

義の子をかかえたまま男性に捨てられ、娼婦となり命を落とす。すなわちエスタが抱いた欲望は、彼女を労働者階級の娘からレイディではなく、墮落した女へと転落させ、最後には命を奪うという悲惨な結果をもたらした。それゆえジョンは、エスタそっくりの美貌をもつ娘が、彼女と同じ道をたどるのではないかと常々、恐れていたのである。

ところが父親の心配をよそに、レイディへの憧れをエスタから吹き込まれたメアリが抱いた欲望の対象は、まさしく自分より上の階級に属する男性だった。

メアリには野望があった。カーソン氏がお金持ちで紳士だからという理由で、彼に引け目を感じたりなどしなかった。数年前に叔母エスタに植えつけられた古いパン種が、彼女の小さな胸の中で徐々に発酵していた。そして恐らくは、彼女の父親の富裕層と紳士階級への嫌悪ゆえに、彼女のそれらに対する欲望は一層、強まった。このような矛盾した心は、イブの時代から存在し、我々は先祖アダムのように、禁じられた果実を最も甘いと夢想するのだ。(79)

父親によって交際を禁じられたハリーこそ、メアリにとっては甘い禁断の果実であり、彼女はその美貌で彼を惹きつけ、「欲望の対象としてハリー・カーソンを私物化」(レスジャック 40)することに成功した。「メアリはエスタと同じく、自分より上の階級の男性を欲望した。そして何より、自分自身の欲望のおもむくままに行動したのだ」(レスジャック 39)。

しかし同じ欲望を抱いたにもかかわらず、メアリがたどる運命はエスタとは大きく違う。その後のメアリとハリーの関係を考察してみよう。メアリの美しさに心奪われたハリーは、その階級差も省みず彼女へのプロポーズを決意する。しかし結婚の申し込みに対して、メアリが示した反応は意外なものだった。

彼は彼女を自分に引き寄せた。驚いたことに、彼女は依然、抵抗した。そう

なのだ！カーソンの妻になればどうなるか、彼女がもう何ヶ月にも渡って思い描いてきたことのすべてが、まさに彼女の手中に収まろうとする今、彼女はそれを拒絶したのだ。(134)

メアリの返答はハリーの予想を完全に裏切り、結婚の承諾ではなく、突然の別れの宣告だった。

「あなたとはもうお付き合いしないことに決めました。私があなたを好きだと思わせてしまったのは間違いでした。でも、私は自分の気持ちを正しく理解していなかったのよ。本当にごめんなさい、私のことを、好きにならせすぎてしまったのなら。」(132)

ハリーの自分に対する過剰な愛をからかうような言葉を残して、メアリは「ありったけの力で身をよじり、あっという間に走り去ってしまった」(134)。自分より上の階級の男性を欲望対象としてきたメアリは、それが手に入った途端、もはや何の価値も見出せないかのごとく、自らの意志でハリーを見捨てたのである。

ハリーへの関心を失ったメアリに対して、「彼女のほとぼしるような気まぐれさ」ゆえに、一層、彼女への想いを駆り立てられたハリーは、「僕は彼女を諦めはしない……今まで以上に彼女を愛している」(135)と告白する。ハリーに対するメアリの欲望が消失した後に残ったのは、以前よりも増大したメアリに対するハリーの欲望だけであり、彼は彼女への過剰な愛に縛られ、そこから逃れることができない。今やハリーにとってメアリは、簡単にもて遊ぶことのできた労働者階級の娘から、気まぐれな心を支配できず、一方的な愛を捧げる崇高な存在へと昇華した。永遠に報われない愛の呪縛でハリーを捕らえたメアリは、この時まさに、「白く青ざめ、誇り高く、神秘的で、まるで崇拜の対象となるような、気まぐれな欲望に満ちた、しかしその心は冷酷である」(ベード 8) 宿命の女、

ファム・ファタルへと変貌を遂げたのである。

美しい肉体を武器として男性の心を支配する「エスタとメアリのセクシュアリティは、『あらゆる災いを生み出した』イブのそのように、この世に死をもたらず」（ウグロー 208）恐ろしい力をもっていた。しかしエスタが獲得した上流階級の士官という禁断の果実は、食べて見れば甘いどころか、それが有した毒により自身と子供の命を失うという悲惨な結末を引き起こした。美貌を利用して男性を誘惑したエスタは、確かに一時、宿命の女だったかもしれない。しかし男性に捨てられ、子供を守ろうとする「無私の母性愛から売春を行ったエスタは、罪人ではなく犠牲者だ」（ウグロー 203）。ファム・ファタルとしてのエスタの宿命的力は、長続きしなかったのである。

一方、メアリとハリーの関係における「犠牲者」は、メアリではなくハリーだ。というのもハリーは、家路を急ぐ夜道でメアリの父親ジョンに狙撃されることにより、あっけなく命を落としてしまう。確かにこの殺人は、労働者と経営者間の交渉の決裂から生じた、ブルジョア階級に対するジョンたちの憤りに起因する。しかし、メア리를愛さなければ、ハリーは命を失わずにすんだかもしれない。なぜなら、「殺人は政治的困難が誘発したのではなく、娘であるメア리를追い回したカーソンに対する、ジョンの嫉妬深い怒りにより引き起こされた」（ウグロー 209）可能性を完全に否定することはできない。メアリは、その魅力にあらがうことのできない禁断の果実そのままに、その甘美な毒でハリーの心を虜にし、最後には彼の命を奪ったのである。

II 人魚

メアリが、男性を支配する力を有したファム・ファタルであることは明らかとなった。実際、メアリを取り巻く男性たちは、彼女が呪いに近い宿命的力を発揮する女であることを認めている。例えばハリーはメアリの移り気な心をふまえて、彼女のことを「かわいらしい魔女」、「かわいらしい浮気女」（132）、「かわいらしいごまかし屋さん」（133）と呼ぶし、彼の父親は、息子の心ばかりか命ま

で奪ったメア리를「宿命のヘレネ」(311)と形容する。さらにジェムは、美しいメア리를香しいバラにたとえるが、それは部屋に飾られるような愛らしいバラではなく、野生に咲き誇るたくましい「野バラ」(161)だ。男性をたぶらかす魔女や、美貌ゆえにトロイ戦争の引き金となったヘレネ、また棘をもつバラのように、美しいメアリの内実には常に危険な性質が隠されていた。

メアリの宿命的力を考察する上で、彼女が非常な興味を示す船乗りウィルによる海の不思議についての話は注目に値する。それは「岩の上に座り、日を浴びている人魚」についての話で、「船乗りたちが初めて人魚を見た時、彼女は豊かな髪を誇らしげに櫛でとかしていた」(147)という。それまで彼の話を所在なく聞いていたメアリは、話題が人魚になった途端に「それについて話してちょうだい」(146)、「人魚はどんな容姿だったの？」(147)と次々と質問をする。ウィルの話から人魚の容姿や性質を分析してみたい。

人魚とは「半分は魚で半分は女」(149)の生き物で、「床屋に置いてあるどんな蠟人形の女性にも負けないほどの、とびっきりの美人」(147)である。人魚は航海中の「船乗りたちにむかって手招きしながら、美しい髪を櫛でとかしていた」(147)ため、彼らが手招きに応じて彼女に近づくと、人魚は次のような行動をとる。

船乗りたちが近づいてくるのを見た彼女は、彼らが持っていた鳥用の獵銃をこわがったからなのか、はたまた、自分の気持ちが正しく理解できない移り気な人魚だったからなのか（人魚の半分は女であることを考えれば、十分にあり得ることだが）、どちらか分らないが、とにかく彼らが人魚の座っていた岩から、わずかオール2本分の距離まで近づくと、彼女はあっという間に尾ひれの先をひるがえし、海の中に飛び込み消えてしまった。(148)

ここで見逃してはならないことは、船乗りを誘うような素振りを見せながら、いざ彼らが近づくと即座に姿を消した気まぐれな人魚の態度と、メアリがプロポー

ズを受けた直後に、ハリーに対して示した反応が極めて類似している点である。ハリーを誘惑しておきながら、いざ彼が自分の掌中に帰したことが分かった、「ありったけの力で身をよじり、あっという間に走り去ってしまった」メアリは、「あっという間に尾ひれの先をひるがえし、海の中に飛び込み消えてしまった」人魚と同じではないのか。ウィルトは誘惑者としてのメアリがもつ人魚のイメージについて、次のように指摘する。

人魚は、官能に満ちた海の渦へと男性を陥れる誘惑者と考えられてきた…セイレーンの歌のように美しいメアリの人魚のイメージこそが—その歌は船乗りたちが彼女の美しい姿と声を楽しむ間に、彼らを死へと誘うのだが—ハリー・カーソンにメアリの美を認識させ、夢中にさせ、彼の巧妙さを無効にしたのだ。(61-62)。

船乗りたちを惑わす「自分の気持ちが正しく理解できない移り気な人魚」とは、メアリ自身を指すと解釈可能である。「メアリが海の不思議に興味津々」(148)なのは、彼女自身が移り気な人魚そのものだったことを考えれば当然だろう。

さらに興味深いのは、メアリはそれを自ら証明するように、人魚の話を聞いた後、実際に海へと向かう。ジョンがハリー殺害の際に使用した銃がジェムのもだったため、ジェムは殺人の濡れ衣を着せられるが、彼のアリバイを証明できるのは、すでにリヴァプールから出航したウィル一人である。そこでメアリはウィルを連れ戻すために、港で知り合った船乗りたちと共に、自ら小船に乗り込みウィルを追いかける。というのも彼女は、その気まぐれな性質のままに、ハリーへの欲望を失った直後に、その対象をジェムへと大きく転換していた。ウィルの乗った船を追いかけるメアリの様子は次のようなものである。

激しい東風が吹きすさぶ中、それが耐え得る最大のスピードで小船は走っていた……

メアリは立ち上がって、マストで身を支えた。そして両腕を差し伸ばし、飛ぶように遠ざかっていく船に、止まってくれるよう懇願した。(286)

進み去る船を停止させようと、小船の上から身を乗り出し、両腕を差し伸ばすメアリの姿は、岩の上から、船乗りたちに向かい手招きしていた人魚の姿と二重写しのようなのだ。彼女が海のないマンチェスターから、生まれて初めて鉄道に乗りリヴァプールに移動してまで海を目指した理由は、ジェムのアリバイ証明のためである。しかし、その表向きの理由の下には、人魚としてのメアリに、元来、潜む宿命的力が、彼女を海へと誘ったからにちがいない。

古来から水の精は、命を奪うほどの強大な力をもつと考えられてきた。

水の精はわれわれがアニマと名づける妖しい女性的な存在の、より本能的な前段階である。この前段階に属するものには、セイレーンたち、海の精たち……があり、これらは若者を惑わし、その生命を吸いとってしまう。(ユング 64)

男性を誘惑し生命を奪い取る宿命的力をもつ水の精は、ファム・ファタルの一種である。

セイレーン、人魚、ニンフ、そして水域に生息するあらゆる女の生き物は、ファム・ファタルの重要な一つのグループを形成する。ヨーロッパ芸術の連綿と続く伝統において、水と女には古くから象徴的な結びつきが見られるが、それは19世紀になると顕著に不吉な色合いを帯び始める。溺死こそ、ファム・ファタルの犠牲となった男性を待つ、最もありがちな運命なのだ。(ペード 8)

水の精における美は死と同義語であり、人魚の美しさに魅入られた若者は、それ

にしばし酔いしれた後は死に至る他ない。⁽⁶⁾

そして類稀なる美貌で若者を誘惑し、死へと至らしめるメアリの人魚としての表象は、ジェムが逮捕されたことを知り驚いた彼女が、地面に倒れこむ姿において一層、強化される。

彼女は地面に身を投げだした。そう、固い敷石の上へ、彼女の柔らかな肢体はゆだねられたのだ。彼女の髪から櫛がこぼれ落ち、金色の豊かな髪が床の上へ広がって、埃が舞った。(223)

美しい髪を広げて地面に身を横たえるメアリの姿は、固い岩の上で「豊かな髪を誇らしげに櫛でとかしていた人魚」(147)の姿と等しい⁽⁷⁾。さらに「あわてた人魚は、櫛を岩の上に忘れていった」ため、櫛は「船乗りたちが手に入れた人魚の持ち物」(148)であることを考えると、メアリの髪から落ちた櫛は、彼女と人魚の分かちがたい結びつきを表している。男性を美貌で誘惑し命を奪うファム・ファタルとしてのメアリは、人魚として表象される時、その宿命的力を最大限に誇示していたのである。

III 櫛

ウィルを連れ戻すことに成功し、裁判でのジェムの無罪を確認したメアリは、その後、疲労により一時、昏睡状態に陥り生死の境をさまよう。しかしジェムの献身的看病のおかげで彼女は無事に回復する。多くの批評家は、この彼女の死の淵からの再生に注目している。例えばパイクは、目覚めた「メアリは無垢な状態へと生まれ変わった」(41)と指摘し、レスジャックは「メアリの回復は、彼女をこれまでとは異なる主体へと変化させた……より優しく穏やかになっただけでなく、彼女は完全に幼児化し、性的魅力を喪失した」(51-52)と主張す

(6) Figure3, 4 (図版3は Tritti, 図版4は高宮所収のものを使用)を参照。

(7) Figure5 (図版は Tritti 所収のものを使用)を参照。

る。なぜなら回復したメアリは、父の死を看取った後にジェムと結婚する。男性を支配するファム・ファタルだったメアリが、平凡な結婚を受け入れた現実には、確かに彼女は、再生を機に生じた「完全なる変身」によりファム・ファタルとしての力を失い、「ジェムとの結婚を受け入れるべく『矯正』された」（レスジャック 52）と言えるだろう。それゆえストーンマンは、メアリの受け入れた「家庭的結末」は、「特異に思えるほど女々しい過失」（85）と非難せずにはいられない。しかし、彼女は本当に宿命的力をすべて喪失し、もはや男性の心を惑わす危険な存在ではなくなったのだろうか。

再生した彼女がジェムと家の近くを散歩する以下の描写は、メアリの人魚としての宿命を考える上で非常に重要である。

二人は川の見えるところへやって来た。メアリは身震いした。

「ああ、ジェム！ 私を連れて帰ってちょうだい。あの川は、きらきら光って、揺れ動き、目をくらませる金属でできているみたい。ちょうど、私が病気になるにかけた時に、そう感じたように。」

ジェムは彼女を家へ連れて帰った。彼女は、顔を下へ向けていた。まるで地面に落とした探し物を見つけるように。(338)

水に対して身震いするほどの過剰反応を示すメアリは、彼女が宿命の人魚としての性質を完全には失っていないことを証明している。人の目を欺き、それを金属と思わせるほど、きらきらとまぶしい光を放つ水は、彼女の中に残存する宿命の人魚としての力の表象に他ならない。再生したメアリが、水を怖がり家に帰りたいと主張するのは、彼女自身がその存在に改めて脅威を感じるほど、彼女のもつ宿命的力が強大であることを示している。

さらに帰宅する途中で、顔を下へ向けたメアリが探す物が何であるのかは作品中、明示されない。しかし、それこそ、まさに彼女の髪から、かつて落ちた櫛ではないのか。死から再生し結婚を受け入れた彼女の宿命的力は、一時、弱まっ

たのかもしれない。しかしメアリが探す落とし物が、人魚の櫛であることは、彼女がファム・ファタルとして再び姿を現し、男性を支配する日が来ることを予兆している。メアリが探し物を見つけ、その櫛を再び髪に飾る時、今まで以上に強大な力を有した宿命の人魚が、そこに誕生するにちがいない。

引用文献

- Bade, Patrick. *Femme Fatale: Images of evil and fascinating women*. New York: Mayflower, 1979.
- Foster, Shirley. Introduction. *Mary Barton*. By Elizabeth Gaskell. Oxford: Oxford UP, 2006. vii-xxvi.
- Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton*. Oxford: Oxford UP, 2006.
- Hughes, Linda K, and Michael Lund. *Victorian Publishing and Mrs. Gaskell's Work*. Charlottesville: UP of Virginia, 1999.
- Lesjak, Carolyn. *Working Fictions: A Genealogy of the Victorian Novel*. Durham: Duke UP, 2006.
- Pike, E. Holly. *Family and Society in the Works of Elizabeth Gaskell*. New York: Peter Lang, 1995.
- Rodgers, David. *Rossetti*. London: Phaidon P, 1996.
- Sonstroem, David. *Rossetti and the Fair Lady*. Connecticut: Wesleyan UP, 1970.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Brighton: Harvester P, 1987.
- Stott, Rebecca. *The Fabrication of the Late-Victorian Femme Fatale: The Kiss of Death*. London: Macmillan, 1996.
- Tillotson, Kathleen. *Novels of the Eighteen-Forties*. Oxford: Clarendon P, 1971.
- Tritti, Peter. *J. W. Waterhouse*. London: Phaidon P, 2005.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. New York: Farrar Straus Giroux, 1993.
- Wildt, Katherine Ann. *Elizabeth Gaskell's Use of Color in Her Industrial Novels and Short Stories*. New York: UP of America, 1999.
- Williams, Raymond. *Culture and Society: 1780-1950*. New York: Columbia UP, 1983.
- フリードリヒ・エンゲルス 『イギリスにおける労働者階級の状態 上』 浜林正夫訳, 新日本出版社, 2000.
- 『イギリスにおける労働者階級の状態 下』 浜林正夫訳, 新日本出版社, 2000.
- 岡田隆彦 『ラファエル前派: 美しき「宿命の女」たち』 美術公論社, 1986.
- 高宮利行 『水の女 溟き水より: From the Deep Waters』 河出書房新社, 2006.
- マリオ・プラーツ 『肉体と死と悪魔: ロマンティック・アゴニー』 倉智恒夫, 他訳, 国書刊行会, 2000.
- 松浦暢 『宿命の女: イギリス・ロマン派文学の底流』 アーツアンドクラフツ, 2004.

C.G.ユング『元型論：無意識の構造』林道義訳，紀伊国屋書店，1995.



Figure 1 D.G. ロセッティ 「リリス姫」 1873 年



Figure 2 D.G. ロセッティ 「魔性のヴィーナス」 1864-68 年



Figure 3 J. W. ウォーターハウス「ヒュラスと水の精」1896 年



Figure 4 E. バーン・ジョーンズ「海の底」1887 年



Figure 5 J. W. ウォーターハウス「人魚」1901 年